

滋賀大学彦根キャンパスの スキー教室の変遷

榎本雅之

Masayuki Enomoto

滋賀大学 経済学部 / 教授

はじめに

スキーは、冬季の運動、レクリエーションとして親しまれている。斜面、雪質など様々な雪面の変化に対応し滑走すること、山から見下ろす景色や動物の足跡など、非日常の自然に身を置く体験、また仲間との交流等、生涯スポーツとして多くの楽しみ方のあるスポーツである。日本に本格的な近代スキーが伝わったのは、1911(明治44)年1月12日、テオドル・エードラー・フォン・レルヒ少佐による新潟県高田での講習とされており、その後、レルヒ少佐が日本各地で講習会を実施し、スキーの普及が進む。教育機関でも、スキーを体育の教材として利用した。近代スキーが伝来してすぐ、小樽高等商業学校は、冬季の屋外の体育活動として、スキーを採用している¹⁾。1926(大正15)年に改正された学校体育の指針である「学校体操教授要目」にも、スキーは課外の運動として記されており²⁾、大正期から体育の教材となった。また、体育におけるスキーの導入は雪深い地域だけに限らない。例えば、本学と同じ滋賀県彦根市の彦根高等女学校では、課外活動として、1923(大正12)年度に伊吹山でスキーを練習した記録がある³⁾。

大学体育におけるスキー教室に関する研究は、スキーの知識や技術の習得、人間関係などの教育的効果を指摘した研究⁴⁾、授業満足度に関する

1) 中川喜直『もうひとつのスキー発祥の地<おたる地獄坂>』小樽商科大学出版会、2011年、8頁。

2) 1913(大正2)年に公布された「学校体操教授要目」で寒国における課外活動として「雪上り」の記載があり、体育にスキーが組み込まれていたことを確認できる(竹之下休蔵『体育五十年』時事通信社、1950年、111-114頁。)

3) 榎本雅之「彦根高等女学校における体育・スポーツの変遷」『彦根論叢』430号、滋賀大学経済学会、2022年、46頁。

4) 永井将史、東山昌央、大石示朗、本田宗洋「本学スキー実習の取り組みと学習成果に関する報告」『東京女子体育大学東京女子体育短期大学紀要』第52号、東京女子体育大学、2017年、119-126頁；松尾美香、西村次郎、山崎めぐみ、望月雅光「大学における自然体験学習のねらいとその教育効果



写真1 左から二十周年、五十周年、六十周年の感謝状

研究⁵⁾、スキー実習がその後の人生にどのような影響を与えたのかを検討した研究⁶⁾など、様々な観点から検討されており、その教育的価値や効果に関する知見が蓄積されている。さらに、スキーのような野外活動は、非日常な自然空間の中で仲間とともに課題を克服していく体験を通して、思いやりや責任感、自立心、協調性などの人間性を育む普遍的な教育効果が期待できる。ユネスコは、「質の高い体育・身体活動・スポーツの提供が、フェアプレー、平等、誠実、卓越、責任、勇気、チームワーク、規律や法律の順守、自身や他者に対する尊重、共同体意識、連帯並びに楽しさや喜びなどの価値を促進するために要するあらゆる潜在的な能力を発揮するために欠かせない」としている⁷⁾。また、人生で良い方向に向かうことについて科学的に研究する学問であるポジティブ心理学における6つの美德(勇気、正義、超越性、節度、人間性と愛、知恵と知識)が体育の授業で育まれること

が指摘されている⁸⁾。他にも、野外活動のような非日常な環境における活動は、困難や脅威に直面している状態に適応できるレジリエンスを高めることが報告されている⁹⁾。

現在の滋賀大学彦根キャンパスにおけるスキー教室は、経済学部・データサイエンス学部の必修の体育科目「スポーツ科学Ⅱ」として履修することができ、運動機会の確保、スキー技術の習得、集団生活を通して、豊かな人間性と社会性を養うことを目的として実施している。このスキー教室は1956(昭和31)年の開始当初から、長野県大町市を中心に実施している。大町市美麻地区(旧美麻村)にある白樺荘を定宿とし、大町スキー場、白馬さのさかスキー場、サンアルピナ青木湖スキー場(以下、青木湖スキー場)、ヤナバ国際スキー場、爺ガ岳スキー場、鹿島槍スキー場などで実習を行ってきた。白樺荘の食堂には、本学のスキー教室の20周年、50周年、60周年の感謝状が飾られ

に関する研究-スキー実習を対象にして-』『岡山理科大学紀要』第52号B、岡山理科大学、2017年、49-59頁；片山昭義、中島悠介「福祉系大学におけるスキー実習の学習効果に関する一考察-事前講習の意義と実習本番に与える影響について-』『浦和論叢』第53号、浦和大学・浦和大学短期大学部、2015年、69-84頁など。

5) 村本名史、菊本智之、瀧澤寛路「大学におけるスキーの体育授業での受講生による授業評価」『常葉大学健康プロデュース学部雑誌』第13巻第1号、常葉大学健康プロデュース学部、2019年、65-74頁。

6) 片山靖富、小木曾一之、叶俊文、佐藤武尊、中村哲夫、元塚敏彦、吉田直樹「大学体育授業の「スキー実習」がもたらす教育効果」『皇學館大学教育学部学術研究論集』第1号、皇學館大学教育学部、2018年、23-33頁。

7) UNESCO「体育・身体活動・スポーツに関する国際憲章(日本学術会議 健康・スポーツ科学分科会 監訳)」2015年(<https://www.mext.go.jp/unesco/009/1386494.htm>) 2024年3月24日閲覧。

8) 橋本公雄、西田順一、木内敦詞、堤俊彦編『自己成長をはかる大学体育-挑戦的課題達成型体育授業の理論と実践-』花書院、2021年、46-51頁。

9) 中川雅智、井澤悠樹「野外運動実習(キャンプ)が大学生の自尊感情、レジリエンス、社会的スキルに及ぼす影響-教員養成課程学生を対象として-」『東海学園大学教育研究紀要』第3巻、東海学園大学、2019年、57-63頁。

ている(写真1)。授業としてのスキー教室は1957(昭和32)年度から実施された。スキー教室について、大学創立40周年の記念誌『滋賀大学史』に「学生諸君に人気のある種目の一つである」と記されている¹⁰⁾。

本稿では、滋賀大学の前身の彦根高等商業学校創立から100周年の記念企画として、スキー教室の変遷を明らかにする。その為に、白樺荘の酒井富雄氏(酒井氏が8歳のとき本学のスキー教室が始まった)と1969(昭和44)年度に体育科目担当教員として着任された三神憲一先生(滋賀大学経済学部名誉教授)¹¹⁾へのインタビュー、過去のシラバスやスキー教室の募集要項、学生が作成した「スキー教室日誌」、授業レポートなどを用い、本学のスキー教室の実相を整理する。

滋賀大学経済学部の体育科目の変遷とスキー教室のはじまり

本学のスキー教室が始まった1956(昭和31)年は、経済白書で「もはや戦後ではない」と記された年であり、戦後復興の時代が終わり、経済的な成長と発展へと進む時期だった。滋賀大学では、新制大学が発足して第4回の卒業生を送り出し、教育・研究体制が安定してきた時期であった¹²⁾。この時の体育の授業は、榎本彦次先生¹³⁾が一人で担当していた。その後、体育の専任教員は、1958(昭和33)年に山内隆先生¹⁴⁾が着任し2名に、さらに1969(昭和44)年に三神憲一先生が着任し3名体制となった。開学当初120名だった経済学部の入学定員も1969(昭和44)年には240名となっていた。

新制大学の開学当初、「体育」の学科名であったが、大学設置基準の制定に伴い、1956(昭和31)年度の『経済学部規程』から「保健体育科目」となった。1年次の「体育Ⅰ(2単位・通年)」、2年次の「体育Ⅱ(2単位・通年)」は卒業のための必修科目であり、体育実技のほか、講義も行われた。この形式は1993(平成5)年度まで続いた。したがって、この時まで、スキー教室には、1年次の「体育Ⅰ」、2年次の「体育Ⅱ」のどちらの履修学生も参加することができた。

1994(平成6)年度から「保健体育科目」から「学部共通科目」となり、授業科目名は「体育Ⅰ」・「体育Ⅱ」から「スポーツ科学Ⅰ」・「スポーツ科学Ⅱ」へと変更された。「スポーツ科学Ⅰ」は1年次の通年で2単位、それまでの「体育Ⅰ」と同様だった。「スポーツ科学Ⅱ」も通年2単位だったが、配当学年が2～4年次へと変更、「心と身体の科学A」、「心と身体の科学B」の3科目の中から1科目を選択する形式に変更された。この期間は、1年次の学生に加え、2～4年次の学生で「スポーツ科学Ⅱ」を履修した学生がスキー教室に参加することができた¹⁵⁾。

1999(平成11)年度に、2年次以上の保健体育関連科目が卒業要件から外れ、2年次以上の学生がスキー教室に参加する授業がなくなった。その後、2002(平成14)年度からは科目名が「学部共通科目」から「体育科目」へ、授業科目名も「スポーツ科学Ⅰ(2単位・通年)」が「スポーツ科学(2単位・通年)」、「スポーツ科学Ⅱ」は「全学共通教養科目」として「身体運動の科学」へと変更、さらに2004(平成16)年度から「体育科目」の「スポーツ科学(2単位・通年)」が「スポーツ科学Ⅰ(1単位・

10) 滋賀大学史編集委員会『滋賀大学史』滋賀大学創立40周年記念事業実行委員会、1989年、106頁。

11) 1969(昭和44)年4月に滋賀大学経済学部に着任、2012(平成24)年3月に定年退職。その後も2019(平成31)年度まで非常勤講師としてスキー教室を引率した(「三神憲一教授略歴と業績目録」『彦根論叢』391号、滋賀大学経済学会、2012年、202-205頁)。

12) 同上書、71頁。

13) 1941(昭和16)年4月に彦根高等商業学校に着任、翌年2月臨時招集により応召、1946(昭和21)年6月復員、1949(昭和24)年12月彦根経済専門学校教授(榎本彦次「略歴と業績」『彦根論叢』滋賀大学経済学会編)134・135号、滋賀大学経済学会、1969年、122-124頁)、1974(昭和49)年3月定年退官。

春学期)」、「スポーツ科学Ⅱ(1単位・秋学期)」と現在の形式になり¹⁶⁾、基本的には1年次の秋学期科目「スポーツ科学Ⅱ」の履修者がスキー教室に参加できる。

滋賀大学経済学部の第一回目のスキー教室は、課外活動として行われた。当時の体育担当教員、榎本先生が、戦後の新しい時代の大学体育教育の方向性を模索する中で、スキーの実習形式の授業に着目したことがきっかけだった。長野県内の大町、さのさか、岩岳、梅池等のスキー場を下見し、その中から大町スキー場が選ばれた。酒井氏によると滋賀大学の卒業生の谷氏(ヨット部OB)が、スキーツアーで白樺荘を訪れており、その縁があって、榎本先生に白樺荘を紹介されたとのことである。このような経緯で、本学のスキー教室は白樺荘を宿舎とし、大町スキー場を利用するようになる。

白樺荘について

スキー場に民宿ができはじめたのは、長野県内の早いところで1949(昭和24)年ごろとされている。大町市では、大町スキー場第2ゲレンデに接して、美麻村の新行民宿が最も早く、1952(昭和27)年に開設された。第2ゲレンデは、ファミリーゲレンデで、傾斜がなだらかなため、遠くから来る家族連れや講習会参加の団体向けだった。白樺荘のある新行には、8軒の民宿があり、1軒あたりの収容力は20名前後だった¹⁷⁾。

白樺荘は、1952(昭和27)年から民宿としての営業を始めた。この地区は、養蚕をするために大きい造りの家が多く、冬のスキー客に宿泊場所を



写真2 2001(平成13)年に建て替えられた現在の白樺荘

提供したのが始まりである。白樺荘は、1960(昭和35)年に建て替えが行われた。当時、スキー利用のほか、夏季に大学入試や司法試験のために勉強する学生を受け入れており(学生村)、収容定員を増やした。その後、改築を繰り返し120名の収容が可能となった。冬季は、中信地区の高体連のスキー合宿を受け入れたほか、本学の授業、また、本学学生会のスキー旅行でも白樺荘を利用した。さらに、1984(昭和59)年度には、本学の公開講座として『母と子のスキー教室』を実施している。募集要項には、1985(昭和60)年1月19日に予備講義を実施、2月9日から11日に大町スキー場で講習となっており、冬季は本学が様々な形で白樺荘を利用してきた¹⁸⁾。

白樺荘は、2001(平成13)年に建て替えを行い、現在の収容定員は50名程度である。今回インタビューを行なった酒井富雄氏は二代目であり、基本的には家族だけで清掃・調理など実習における生活面の支援を担う。また、氏はスキー場の運営者やレンタル業者との調整等にも寄与し、本学の実習全般を支え続けてきた。

14) 1958(昭和33)年3月着任、2001(平成13)年3月定年退職(『山内隆教授 略歴と業績目録』『彦根論叢』329号、2001年、滋賀大学経済学会、231-233頁)。

15) 1994(平成6)年度入学生が2年次となる1995(平成7)年度『シラバス』の2～4年次配当「スポーツ科学Ⅱ」にスキー授業の選択肢が提示されており、2年次以上の学生もスキー教室に参加可能であったことが確認できる。

16) 道上静香「滋賀大学経済学部における正課体育の歴史の変遷」『彦根論叢』第391号、滋賀大学経済学会、2012年、74-93頁。

17) 大町市スキークラブ『シュプール-大町のスキー史』大町市スキークラブ、1988年、93頁。

18) 滋賀大学史編集委員会、前掲書、210頁。



写真3 営業停止後2009(平成21)年の大町スキー場

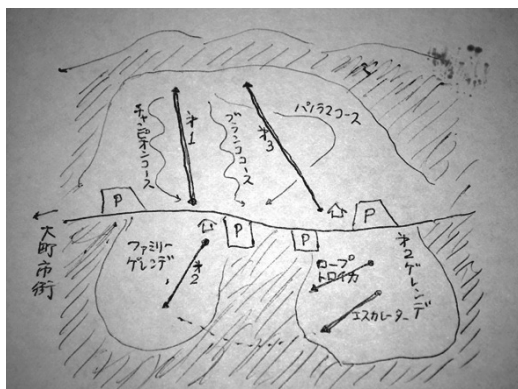


写真4 大町スキー場のゲレンデ図

ともに、追憶のゲレンデ「大町スキー場(大町市)」(<http://old-skier.seesaa.net/article/116367061.html>)より投稿者の許可を得て転載(2024年3月11日閲覧)。

大町スキー場について

スキー教室は、その始まりから45年間、長野県大町市の大町スキー場を利用した。大町スキー場は長野県内で最も早い時期に開発され、北アルプス山麓、大糸線沿線で最初に作られた本格的なスキー場である。場所は、中山と呼ばれる地域にあり、ここでは大正期からスキーが行われていた。昭和初期にはスキー愛好家によって、ゲレンデ作りが行われた歴史のあるスキー場である¹⁹⁾。

1957(昭和32)年、スキー場開発運営を目的として、大町観光株式会社が設立され、翌年には大北地域で最も早く鉄骨リフトが架設された²⁰⁾。1969(昭和44)年、東側に第2ゲレンデを整備し第2リフトが、第1ゲレンデにも第3リフトが架設された。第2ゲレンデには雪上人員運搬機(トロイカ)を設置、さらに雪上エスカレーター、テーパリフト(原文ママ、Tバーリフトか)、ロープトウが個人の運営で設置された。1986(昭和61)年に株主経営陣が更新された大町観光株式会社が新発足し、

第1ゲレンデの斜面整備、第1リフトをペアリフトとして新設架替、第2ゲレンデの斜面整備、ナイター照明設備の新設などが行われた²¹⁾。

大町市スキークラブ発行の『シュプール-大町のスキー史』に、滋賀大学のスキー教室についての記載がある。

昭和26(1951)年(原文ママ、昭和31年1956年の誤植)滋賀大学が榎本彦次教授に率られ、体育の実習に来場した。宿舎は美麻村新行・白樺荘である。大町スキー場をホームグラウンドに滑っている、種山平一、小林恒雄らに榎本教授から指導員派遣の要請があった。当時仲間の中に指導員資格所有者はなかったが、引きうけることになった。西山で教わった技術や指導法が大変役立つことになったが、解散後も雪の上で実際に、指導法や技術についての研修を続けた。この講習がきっかけとなって、団体に対する指導の対応策も自然に身につくようになった²²⁾。

19) 大町市スキークラブ、前掲書、26-50頁；長野県スキー連盟編『長野県スキー史』信濃毎日新聞社、1978年、193-205頁。

20) 大町市史編纂委員会編『大町市史第5巻(民俗・観光)』大町市、1984年、848頁。

21) 大町市スキークラブ、前掲書、45-50頁。

22) 同上書、155頁。大町スキー場では、昭和初期に大町スキー倶楽部が誕生、一旦活動がなくなるが、戦後、再発足する。当時は講習会が少なかったが、白馬村西山で技術指導を受けた。

この記述から、スキーがレジャーとして広がる時期、学生の団体実習が、当地の指導員の指導力向上に貢献していたことがわかる。

スキー教室は、長い間、大町スキー場の第2ゲレンデで実習をしていたが、搬機（ロープトウ）が使えなくなったので、第1ゲレンデでの実習となり、2000（平成12）年度まで行なった。大町スキー場は経営的な理由により、2008（平成20）年に閉鎖になる。

大町スキー場でのスキー教室

実習が開始した当初、学生は信濃大町駅で集合、信濃大町駅から長野行きの定期バスで白樺荘へ移動していた。その後、信濃大町駅から貸切バスで白樺荘へという形式に変わった。初期の学生は、学生服でスキーを行っていた。また、スキー用具を白樺荘に持ち込んでいた。自分の用具を持っていたのか、どこかで借りていたのかという点は不明である。

三神先生が着任した1969（昭和44）年頃になると、スキー用具（スキー板、ブーツ、ストック、ワックス等）は全て大学の備品として管理されていた。当時のスキー板は2メートル近くあり、このスキー板の裏の両端には30から50センチメートル位のエッジをビスでとめて使用していた。実習中にエッジのビスがとれたり、エッジが部分的に破損したりすると、応急修理を山小屋で行い、破損のひどいものは、宿舎で取り替えて使用した。ブーツは、厚いゴム製で、1日の実習が終わると乾燥室で乾かす。しかし、完全には乾き切らず、濡れたままのブーツを使用した。そのため、足の裏や踵にマメができる学生がおり、実習後、宿舎で治療した。実習の全日



写真5 大町スキー場第一ゲレンデでの写真、学生はゼッケンを着けて実習を行う（三神先生提供）

程が終わると、スキー板、ブーツ、ストック等の選別を行い、用具の廃棄や新規の購入作業があった。その後スキー用具は、大学の備品からレンタル用品へと変わる。これはカービングスキーになるまだ前のことで、レンタル用品を利用したことで、これまでゴムのブーツにカンダハーだったものが、ステップイン式のブーツとビンディングに変わった。

1969（昭和44）年は、移動手段として列車を利用していた時期だった。彦根を22時頃出発、名古屋に向かい、名古屋から中央本線の夜行列車で松本、松本から大糸線で信濃大町、そこからバスで白樺荘へ向かう、10時間程度の移動だった。1975（昭和50）年頃に、移動手段を大学出発の貸切バスに変更した。これにより、彦根を8時に出発しても、16時頃には白樺荘に着くスケジュールに変わり、移動の負担が減った分、講習の充実が期待できた。

1969（昭和44）年頃から1973（昭和48）年頃は、経済学部の学部長や若手教員もスキー教室に参加した。当時の小倉栄一郎学部長は、列車移動の時代、4、5年続けて参加し、実習中は指導を受け

る各班を回りながら、学生達を励ました。また、昼の休憩の間は、持参したスケッチブックを開いて、雄大な北アルプスの山々やスキー場周辺の風景などを描いた。夕食後は、若手教員や学生と歓談した。若手教員は、それぞれの技能に応じて各班に入り、学生と共に講習を受けた。大学紛争の火種が燦る時期、学部長はじめ教員と学生が同じ屋根の下で、スキーだけでなく、様々な話をし、和気藹々とした雰囲気の中でスキー教室が実施されていた事実を知って欲しいと三神先生は述べている。

三神先生の回顧によると、先生の起床は午前5時、身支度を済ませてすぐに、乾燥室から百人以上のブーツを大きい順に玄関に並べていく、続いてスキー板とストックの点検を行う。6時になると全ての部屋を回って、寝ている学生を起こす。朝食は各部屋の班長が台所に7時に取りに行き、自分の部屋で食べる形式をとっていた。朝食を終え、7時30分から8時30分の時間にスキー板とブーツを合わせる作業がある。スキー板の留め具は前後に3センチメートル移動することが可能であるが、中にはブーツが古いため、踵の部分がすり減っていたり、底の浅くなったりしたものや、雪の付いたブーツを無理やりスキー板に合わせようとする学生などがおり、一人一人合わせる作業が大変だったとのことである。この作業の後、スキー場へと向かう。

白樺荘から実習先には、スキーを滑って、あるいは、歩いて向かう。白樺荘から300メートル程度下ると、種山商店があり、その横から少し山を登ると大町スキー場の第2ゲレンデがある。そこはすり鉢状のゲレンデとなっていた。白樺荘からゲレンデまでは、遅い人でも移動に30分はかからなかった。ゲレンデの集合時間は、8時50分、実習の指導時間は9時から12時と12時から16時だった。

この頃の実習グループは上級グループを地元インストラクターが、そして初級・中級グループを教員が指導した。その後、全日本スキー連盟の公認指導者に依頼する形式に変わり、大町スキー学校（1965年発足、当時、鹿島槍国際スキー場、青木湖スキー場、爺ガ岳スキー場に分校を持つ大町地域のスキー指導の中核を担う²³⁾）に技術指導を依頼するようになった。

実習の参加者は多い時で、一度にバス2台、100名程度の参加者で、12月後半と1月4日から3交代、2月下旬から3月上旬にかけて3交代、合計600名以上が参加していた。この形式が2000（平成12）年度まで続いた。

大町スキー場の第2ゲレンデは、すり鉢状なので、必ずどこかで止まってくれる利点があった。ゲレンデでは、階段登行で斜面を登り、その上をゆっくりプルークで何度も滑り、雪面を整地していく。それを繰り返すことにより、実習用のゲレンデを整備していた。一つの指導グループは20名近くであった。指導内容は、直滑降、プルーク・ファーレン、プルーク・ボーゲン、斜滑降、シュテム・ターンへと基礎的なスキー技術の積み上げが行われた。

午前の実習が終わり12時から13時までが昼休憩で、昼食の時間となる。スキー場に隣接している山小屋を改良したところが昼食の場所だった。この山小屋まで、白樺荘のご主人らが、200個以上のおにぎりを準備し、ソリに乗せ、運んだ。午後の実習は13時から16時までであり、その後、40分ほど自由滑走、17時には宿舎に戻るとというのが実習一日の流れだった。

実習中には、エッジやストックの破損、スキー板にワックスがうまく塗れていない学生のスキー板が滑らないなど、大小様々なトラブルがあった。怪

23) 長野県スキー連盟『長野県スキー連盟五十年史』長野県スキー連盟、1982年、199、200頁。

我が発生しないよう「転倒する場合は斜め後ろ」を徹底し、安全面に注意した授業が展開された。その甲斐あってか、大町スキー場での実習で骨折した学生は一人もいなかった。

実習場所は、大町スキー場の第2ゲレンデから第1ゲレンデへ移り、20年近くそこで実施した。また、雪の少ない時は、樺池高原スキー場や白馬岩岳スキー場（現在の名称は白馬岩岳スノーフィールド）でも実施した。課外活動として、教育学部と合同で、白馬岩岳スキー場や戸狩温泉スキー場で実施したこともある。

2001(平成13)年度以降の スキー教室

大町スキー場の利用は2000（平成12）年度で最後となる。それ以降の実習で利用したスキー場について、また各年度の参加者数を入手した学生の「スキー教室日誌」、過去のシラバスと募集要項から一覧を作成した(表)。

2001(平成13)年度はヤナバ国際スキー場を利用した。ヤナバ国際スキー場が選ばれた理由は、白樺荘からの移動時間を考慮してだった。しかし、2年間の実習を行なった結果、本学の実習には不向きと結論を出し、実習先を変更する。ヤナバ国際スキー場には、青木湖スキー学校の分校があり、実習の指導を青木湖スキー学校のインストラクターが担当していた。この縁があり、2003（平成15）年度から実習先を青木湖スキー場へと変更する。ところが、青木湖スキー場の営業が不安定となり、白馬さのさかスキー場へと変更、これは、実習での技術指導を行っていた青木湖スキー学校の海川正広校長からの提案だった。2008（平成

表. 2001(平成13)年度以降の実習先と受講者数

実施年度	実習場所	受講者数	備考
2001（平成13）	ヤナバ	不明	
2002（平成14）	ヤナバ	不明	
2003（平成15）	青木湖	120から130名	
2004（平成16）	青木湖	不明	
2005（平成17）	青木湖	不明	
2006（平成18）	青木湖	不明	
2007（平成19）	青木湖	不明	
2008（平成20）	さのさか	不明	募集時は青木湖スキー場で実施予定
2009（平成21）	さのさか	80名程度	募集時は青木湖スキー場で実施予定
2010（平成22）	爺ガ岳	不明	
2011（平成23）	爺ガ岳	85	
2012（平成24）	爺ガ岳	不明	
2013（平成25）	爺ガ岳	135	
2014（平成26）	爺ガ岳	124	
2015（平成27）	爺ガ岳	113	
2016（平成28）	爺ガ岳	126	
2017（平成29）	爺ガ岳	117	
2018（平成30）	爺ガ岳	127	
2019（平成31）	鹿島槍	127	募集時は爺ガ岳。雪不足のため変更
2020（令和2）	中止		COVID-19のため中止
2021（令和3）	中止		COVID-19のため中止
2022（令和4）	爺ガ岳	27	COVID-19対策として人数を絞って実施
2023（令和5）	爺ガ岳	85	

20）年度と2009（平成21）年度の参加募集時は、青木湖スキー場での実施となっているが、実際に実習を行ったのは白馬さのさかスキー場だった。そして、2010（平成22）年度から現在の爺ガ岳スキー場へ移った。以降、雪不足のため鹿島槍スキー場(平成31年度)での実施やCOVID-19のため実習の中止(令和2年度・3年度)もあったが、継続して爺ガ岳スキー場を実習ゲレンデとして利用している。

参加者数は、2001(平成13)年度から、1班(3泊4日) 定員40～45名を3班募集している。学生が書いた2003（平成15）年度の「スキー教室日誌」には全体で120名から130名の参加と記されていることや、確認できる「スキー教室のしおり」に記されている参加者数から、少ない年で2班編成の80名程度、多い年で120から130名程度の学生が参加した。記録には残っていないが、定員を超過したため参加できない学生がいた年もあった。

ヤナバ国際スキー場に移った頃から、スキー板が、自分の身長より長く、トップからテールまでの

幅が同じストレートスキーから、トップとテールの幅が広くウエスト部の幅が狭いカービングスキーへと変わる。2002(平成14)年度の「スキー教室日誌」には、以下のようにカービングスキーを利用した感想を述べたものがある。

小さい頃からスキーはしていて(略)、インストラクターの人にカービングスキーの特徴を使った滑り方を教えてもらったことは大きかった。カービングスキーは知っていたが、本来のスキーより、どの点でターンがしやすいとか知識がなかったからだ。本来のスキーは外足に体重をかけて滑るのに対し、カービングスキーは5:5の比率で左右の足に体重をかけて、整備されているコースを滑るのに適していると習った。

スキーは得意でしたが、(略)旧型のスキーしかすべることがなく、カービングスキーという物を今回の実習で初めてすべりました。カービングスキーは旧型のスキーと比べて、力をあまり必要とせず、簡単に曲げることができます。

これ以前の「スキー教室日誌」の学生の感想でも「転ぶこと」について記されていたが、カービングスキーの導入以降、「暴走」という言葉が多くみられるようになる。ストレートスキーからカービングスキーへと変わる過程において、新しい性能をもつスキーに対する学生のとまどいや驚きなどが記されている。

近年のスキー教室について

現在、スキー教室は経済学部とデータサイエンス学部対象の秋学期開講科目「スポーツ科学Ⅱ」

で実施している。「スポーツ科学Ⅱ」は教養科目群の体育科目として、必修科目である。「学生の心身両面の特性をふまえ、様々な運動・スポーツの実践や理論の学習から、運動・スポーツの意義や価値を理解し、スポーツの実践方法および生涯にわたって運動・スポーツの楽しさを享受する能力、豊かなライフスタイルを形成できる基礎的能力を養う」ことを目的としており、学生は秋学期開講の通常授業か、集中授業として行うスキー教室を選択できる。秋学期が開始する10月までに受講生を確定させるため、7月にスキー教室について学生に案内する。2019(平成31)年度まで先着順で受講希望者の申込受付を行っており、申込日には受付先である体育館内のスポーツ科学準備室前に、受講希望者が長い列を作っていた。しかし、コロナ禍以降は人が密集するのを避けるため、受講希望者による抽選をWeb上で行った後、正式申込する仕組みに変更した。

実習までに事前講義を、10月、12月、2月にそれぞれ1回、集団生活に関する準備や注意事項、スキーのレンタル用品について、スキーの技術やウィンタースポーツの安全管理についてなどをテーマに行う。実習は秋学期のテスト期間が終了後の2月半ばに、3泊4日の日程で3回実施している。

実習初日は、9時に大学に集合、貸切バスで白樺荘へ向かう。到着後、施設の利用について酒井氏から説明を受け、レンタル用品であるウェアやブーツのフィッティングを行う。そして、これまでのスキー経験に基づいた技術講習班に分ける。技術講習班は6名から10名程度を1つの班として、5つの班を設定する。近年は、定期的に家族でスキーをしたことがある、今までに何度か家族でスキーをしたことがある、全くスキーをしたことがな



写真6 爺ガ岳スキー場での技術講習前の集合している様子



写真7 白樺荘の食堂で実習の振り返りのレポートを作成する様子

いという3グループに分かれる傾向がある。数年前まで、受講生の班分けにおいて、小学校から高等学校までの間に学校でのスキー教室を経験した学生が一定数いたが、近年は少なくなっている。技術講習班では、班当たりの男女比や経済学部とデータサイエンス学部の学生比ができるだけ等しくなるように分ける。スキー教室には、部活やサークル等、普段の生活を一緒に過ごす学生がグループで申し込んでおり、バスの移動や宿舎での生活も同じ仲間と過ごすことが多くなる。技術講習では、学生間の交流を活発にするために、できるだけ異なる属性の学生で班を組めるように配慮している。実習を振り返ったレポートにも、技術講習班における人間関係の構築について、自身が意識したことや新しい出会いなど、そこでの交流について肯定的な評価が多く見られる。技術講習班を分けた後、翌日からの実習について、より具体的なスキー技術の講義を行う。最終的なスキー技術の習得として、どのような斜面、雪質でも安全に滑走できる技術の獲得を目指すという目標を掲げ、実習前の事前講義では技術習得の全体像を示し、実習初日の講義で、受講生の経験や技術レベルに応じて、

何をどこまで習得するのか、個別の目標設定を行う。

実習二日目は、貸切バスで白樺荘から爺ガ岳スキー場へ移動し、スキー場で開校式を行う。技術指導は、現地の全日本スキー連盟の公認指導者が当たる。午後に、ゲレンデの一部の場所を設定し、受講生一人一人の滑走について動画撮影を行う。午前・午後の講習を終えた後、宿舎に戻り、夕食後、講義を行う。講義では、ゲレンデで撮影した動画を基に、学生それぞれがどのような目標設定をし、どういった点を意識したのか説明し、教員から学生へ助言する。さらに、学生間でも意見交換を行う。学生のレポートには、この意見交換により、どういったことを意識しているのか、どの点を修正したいのかなどを共有することができ、その後の技術講習において、スキー技術の習得に関するコミュニケーションをとることができたといった評価があり、技術習得やコミュニケーションの円滑化といった点で効果的だと考えられる。

実習三日目も、実習二日目と同様の日程で行う。三日目は、引率教員が技術講習班別の動画撮影を行う。これにより、ゲレンデの斜度や雪質の違

いにより、自分の滑走がどのように変化しているのか、他の受講生との比較などを確認できる。午前・午後の講習を終えた後、宿舎に戻り、夕食後、講義を行う。講義は、集団生活を通した学生間の交流や個々が担う責任について、生涯スポーツとしてのウインタースポーツの可能性について、学生生活を含むこれからの運動・スポーツとの関わりについて、最終日の自由滑走における注意点の確認などを行う。その後、学生は学習の成果を確認するためのレポートを作成する。

実習四日目は、爺ガ岳スキー場へ移動し、自由滑走を1時間30分程度、その後閉校式を行い、白樺荘に戻る。レンタル用品の返却や部屋の片付けの後、昼食、そして、貸切バスで大学へ戻るというのが、近年の実習の流れである。

スキー教室のような野外の実習では、通常授業以上の体調管理やリスク管理、学生への注意喚起が必要である。本学のスキー教室が長く続いてきたのは、これまでの引率者や酒井氏が実習の計画や準備を入念に行い、実習における学生の危機管理意識を高めたからだと考えられる。技術講習中は、教員が全ての学生の状況を把握することは困難だが、学生間でコミュニケーションをとり、何かあればインストラクターや引率教員に報告するという形式を徹底することで、体調不良や怪我などに対応している。

まとめにかえて

本稿では、本学のスキー教室について、長年、その実施に携わった酒井氏と三神先生のインタビューを中心にその変遷を明らかにした。

本学のスキー教室は、1956（昭和31）年に、当時の体育科目を担当していた榎本彦次先生が、新しい時代の大学体育教育の方向性を模索する中で、スキー教室の導入を検討し、長野県大町市美麻の白樺荘を宿舎とし、大町スキー場での実習が始まった。現地での実習は3泊4日で、この形式は現在も続いている。

本学経済学部の方針では、1993（平成5）年度まで、1年次と2年次の実技体育が必修であり、スキー教室は、1年次の「体育Ⅰ」と2年次の「体育Ⅱ」で履修することができた。実習の参加者は多い年で年間600名以上にもなった。その後、1999（平成11）年度の学部規定の変更により、スキー教室に参加できるのは、基本的に1年次生だけとなった。2001（平成13）年度以降の参加者は、少ない年で80名程度、多い年で120名程度と年によって異なる。

大町スキー場での実習は、その始まりから2000（平成12）年度まで45年間続いた。2001（平成13）年度から、ヤナバ国際スキー場、青木湖スキー場、白馬さのさかスキー場での実施を経て、2010（平成22）年度から爺ガ岳スキー場へと実習地が定まった。その後、雪不足のため鹿島槍スキー場での実施やCOVID-19のため実習の中止などもあったが、継続して爺ガ岳スキー場を利用している。

学生の移動は列車から1975（昭和50）年ごろに貸切バスに変わった。用具は大学備品からレンタル品へ、またスキーの板、ビンディング、ブーツ、ウェアなども新しい機能をもつ用具を取り入れた。昭和40年代の実習では、学部長や若手教員もスキー教室に参加し、学生に混じってスキーの技術講習を受け、実習以外の時間は学生と交流した。

戦後、新制大学がスタートして以降、求められる大学像の中で、大学体育は体力・健康づくり、運動技能の習得、豊かな人間性の涵養や人間形成が教育の目的や目標として掲げられている²⁴⁾。したがって、大学体育の授業では、運動量の確保、スポーツ技術の習得、授業に参画する態度の育成などが求められる。さらに、スキー教室は、非日常な環境の中で仲間とともに課題を克服する体験ができ、思いやりや責任感、自立心、協調性など豊かな人間性の涵養という点でも効果的な授業であろう。現代社会はデジタル化が進み、生活が便利で快適になった。一方で、直接的な人々の交流や自然と触れ合う機会の減少など、人間性を育む要素が失われている。このような現代社会において、スキー教室のような非日常の体験は、より重要な学習機会となり得る。

本学のスキー教室は体育担当教員や白樺荘の酒井氏、事務職員、現地のインストラクター、スキー場関係者、バス運転手らに支えられてきた。また、長い歴史の中で多くの学生が参加しており、時代背景に応じた実習に対する様々な経験や思いがあろう。これらの多様な視点を記録し、分析するためにオーラルヒストリーを収集し、より多面的にスキー教室の変遷を明らかにすることを今後の課題としたい。

【付記】

本研究は令和5年度陵水学術後援会学術調査・研究の助成を受けて行われたものである。

参考文献一覧

- ◎榎本彦次「略歴と業績」『彦根論叢 / 滋賀大学経済学会編』134・135号、滋賀大学経済学会、1969年、122-124頁。
- ◎榎本雅之「彦根高等女学校における体育・スポーツの変遷」『彦根論叢』430号、滋賀大学経済学会、2022年、36-54頁。
- ◎片山昭義、中島悠介「福祉系大学におけるスキー実習の学習効果に関する一考察-事前講習の意義と実習本番に与える影響について-」『浦和論叢』第53号、浦和大学・浦和大学短期大学部、2015年、69-84頁。
- ◎片山靖富、小木曾一之、叶俊文、佐藤武尊、中村哲夫、元塚敏彦、吉田直樹「大学体育授業の「スキー実習」がもたらす教育効果」『皇學館大学教育学部学術研究論集』第1号、皇學館大学教育学部、2018年、23-33頁。
- ◎橋本公雄、西田順一、木内敦詞、堤俊彦編『自己成長をはかる大学体育-挑戦的課題達成型体育授業の理論と実践-』花書院、2021年。
- ◎松尾美香、西村次郎、山崎めぐみ、望月雅光「大学における自然体験学習のねらいとその教育効果に関する研究-スキー実習を対象にして-」『岡山理科大学紀要』第52号B、岡山理科大学、2017年、49-59頁。
- ◎道上静香「滋賀大学経済学部における正課体育の歴史的変遷」『彦根論叢』第391号、滋賀大学経済学会、2012年、74-93頁。
- ◎「三神憲一教授 略歴と業績目録」『彦根論叢』391号、滋賀大学経済学会、2012年、202-205頁。
- ◎村本名史、菊本智之、瀧澤寛路「大学におけるスキーの体育授業での受講生による授業評価」『常葉大学健康プロデュース学部雑誌』第13巻第1号、常葉大学健康プロデュース学部、2019年、65-74頁。
- ◎永井将史、東山昌央、大石示朗、本田宗洋「本学スキー実習の取り組みと学習成果に関する報告」『東京女子体育大学東京女子体育短期大学紀要』第52号、東京女子体育大学、2017年、119-126頁。
- ◎長野県スキー連盟編『長野県スキー史』信濃毎日新聞社、1978年。
- ◎長野県スキー連盟『長野県スキー連盟五十年史』長野県スキー連盟、1982年。

24) 橋本公雄ほか編、前掲書、19頁。

- ◎中川雅智、井澤悠樹「野外運動実習(キャンプ)が大学生の自尊感情、レジリエンス、社会的スキルに及ぼす影響-教員養成課程学生を対象として-」『東海学園大学教育研究紀要』第3巻、東海学園大学、2019年、57-63頁。
- ◎中川喜直『もうひとつのスキー発祥の地くおたる地獄坂>』小樽商科大学出版会、2011年。
- ◎大町市史編纂委員会編『大町市史第5巻(民俗・観光)』大町市、1984年。
- ◎大町市スキークラブ『シュプール-大町のスキー史』大町市スキークラブ、1988年。
- ◎滋賀大学史編集委員会『滋賀大学史』滋賀大学創立40周年記念事業実行委員会、1989年。
- ◎竹之下休蔵『体育五十年』時事通信社、1950年。
- ◎「追憶のゲレンデ」(<http://old-skier.secsaa.net>)2024年3月11日閲覧。
- ◎UNESCO「体育・身体活動・スポーツに関する国際憲章(日本学術会議 健康・スポーツ科学分科会 監訳)」2015年(<https://www.mext.go.jp/unesco/009/1386494.htm>) 2024年3月24日閲覧。
- ◎「山内隆教授 略歴と業績目録」『彦根論叢』329号、滋賀大学経済学会、2001年、231-233頁。

The History of the Ski Class at Hikone Campus, Shiga University

Masayuki Enomoto

This paper draws mainly on interview surveys to clarify the history of the Ski Class at the Hikone Campus of Shiga University.

The Ski Class is a physical education class in the Faculty of Economics. It has a long history that began in 1956 when Hikoji Enomoto, who was in charge of physical education at Shiga University's Faculty of Economics, decided to implement the Ski Class as part of his search for a new program of university physical education.

The guesthouse Shirakaba-so in Miasa, Omachi City, Nagano Prefecture, has always been used as the dormitory. Since the beginning, the students have lived there in a group setting for four days, and this form continues to this day.

According to the past Faculty Degree Requirements, the Ski Class was open to first- and second-year students until 1994 and attracted more than 600 participants a year in most years. Currently, only first-year students are eligible, and the number of participants since 2001 has been around 80 at the lowest and 120 at the highest.

The Ski Class was held at the Omachi Ski Resort until the school year 2000. After that, sessions were held at the Yanaba International Ski Resort, the Sun Alpina Aokiko Ski Area, and the White Resort Hakuba Sanosaka, and in the school year 2010, the training slope was settled on at the Jigatake Snow Resort.